

[研究論文]

痛みの概念

塚 原 典 央

はじめに

後期ウィトゲンシュタイン哲学におけるキーワードは、何はさておき「言語ゲーム」であろう。しかしこの言葉ほど多様に解釈された言葉もないし、またウィトゲンシュタインを離れて一人歩きしたもの他にはない。それはクーンの「パラダイム」以上であろう。それ故この言葉を安易に使用してウィトゲンシュタインを解釈することは、彼の哲学の核心を覆い隠してしまうことになりかねない。

小論では後期ウィトゲンシュタインの言語観を、私的言語批判の議論から捕らえてみたい。具体的には、「痛み」といった感覚語がどのように習得され、どのように概念化されるのかを考察する。言い換えれば、「痛み」という語を使用する言語ゲームの解明である。しかし「言語ゲーム」という言葉を極力使用せずに、この解明を試みることにしたい。

反転スペクトル

われわれは他人の意識内容、例えば他人の痛みといった感覚や悲哀といった感情を直接観察することはできない。この点から所謂反転スペクトルのパラドックスが生じてくる。それは、他人の感覚内容を直接知ることができない以上、私に赤く見える消防自動車でも他人にも同じように赤く見えているのかどうか分からない。たとえ「その消防自動車は何色に見えますか」と尋ねて、その人が「もちろん赤く見える」と答えても、この疑いは消えない。というのは色の名前を始め言葉はみな後天的に習得されるものである以上、その人が生まれつき赤と青のスペクトルが反転していて、われわれに赤く見えるものが青く、逆にわれわれに青く見えるものが赤く見えていても、その青く見える色を「赤色」と呼ぶように、赤く見える色を「青色」と呼ぶように学んでしまう可能性を消すことはできない。もしそうであるならば、その人には青く見えている消防自動車の色はと尋ねられると、その人は「もちろん赤色」と答えるようになってしまうからである¹⁾。

ではこのパラドックスの結論はどうなるのだろうか。一つの考え方としては、みんなが「赤

受付日 2008.11.1

受理日 2008.12.15

所 属 福井県立大学学術教養センター

い」と言っているものを「赤い」と言い、みんなが「青い」と言っているものを「青い」と言えるならば、つまり反応がみんなと同じならば、実際には何色に見えていようと問題ない。換言すれば、他人に何色に見えているのか直接調べる術がないのだから、判断や振舞における一致以上のことは調べようがない。従って、判断や振舞において一致していれば、何色に見えていようと、さらにたとえ何も見えていなくとも、問題ない、関係ない、構わない、どうでもよい、ということになる。

この点についてウィトゲンシュタイン自身、『私的経験』と『感覚与件』の講義のためのノート（以下、LPE と略記する）」において、目の不自由な人を例に挙げて次のように述べている。

LPE p.232. : われわれは、目の不自由な人は何も見えていないと言う。だがただ単にわれわれがそう言うだけでなく、彼自身もまた自分は何も見えないと言うのである。だが私は、「彼には何も見えていないということに、彼はわれわれと意見が一致している」あるいは「彼はその点をとやかく言わない」と言いたいのではなく、われわれが習得した言語と同じ言語を彼も習得しているので、彼もまたこの事実をこの仕方でも描写するのだ、と言いたいのである。ではどのような人をわれわれは目の不自由な人と呼ぶのか。目が見えないことに対するわれわれの規準は何か。それは、ある種の振舞である。そしてある人がその特定の仕方でも振舞うとき、われわれは彼を目の不自由な人と呼ぶだけではなく、その人に自分自身を目の不自由な人と呼ぶように教えるのである。この意味において、彼自身にとっても目の不自由な人の意味を定めるのは、また彼の振舞に他ならない。

ウィトゲンシュタインによれば、目が見えているか否か、目が不自由な人であるか否かを判断する規準は、その人に実際にものが見えているのか否かということではなく、その人の振舞、目の不自由な人に独特の振舞に他ならない。つまり、ある人の目が見えているかどうかを判断するために必要なのは、その人の振舞であって、その人が実際に目が見えているかどうかは関係ない、ということになる。逆に見るならば、たとえその人に物が見えていても、その人が目の不自由な人の振舞をするならば、例えば目の前の物を避けることができないとか、手探りでしか物を取り上げられないといった振舞をするならば、その人は目の不自由な人ということになる。もちろん、物が見えているのに、故意に見えない振舞をする場合は除く。この点は、消防自動車は何色に見えているのかを問題にする場面でも、その人の振舞が問題なのであって、実際にその人にそれが何色に見えているのかはどうでもよい、ということと同じなのである。

そしてこの事情は感覚・感情一般に拡大して考えることができる。例えば、ラケットを持っている腕に激痛が走っているのに、楽しげにテニスをしている人は、「腕に痛みをもっていない人」であるし、逆に何も感じていないのに腕を抱え込んで呻きのたうち回っている人（振

りをしたり演技をしている場合を除く）は、「腕に痛みを持つ人」となる。このように考えることは、振舞だけを問題にして、痛みの感覚そのものや視覚内容そのもの、色そのものを問題にしない、言い換えればそれらを見無視することになるように見える。ウィトゲンシュタイン自身次のように述べている。

LPE p.255. : 「無視する」に戻ろう！ 私は生命を見無視しているように見えるだろう。生理学的に理解された生命ではなく、意識としての生命である。また生理学的に理解された意識ではなく、すなわち外部から理解された意識ではなく、経験の本質そのものとしての意識、世界の見え、いや世界そのものとしての意識である。

では、彼は本当に意識を見無視しているのだろうか。痛みの感覚そのもの、視覚内容そのものはどうでもよい、振舞さえあればそれでよいとしているのだろうか。そうであるならば、行動主義をとらなければならないのだろうか。確かにわれわれは他人の感覚や感情、思い、考えを直接捉えることはできないが、しかし振舞さえあればそれらはどうでもよい、とすることには違和感がある。これは出てきた結論がおかしいのではなく、この問題の設定の仕方そのものに問題があるのではないか。

私的言語批判

ところでウィトゲンシュタインは『哲学探求（以下、『探求』、PU と略記する）』において、「私的言語批判」という議論を展開している。私的言語とは、その「言語に含まれる語は、発話者のみが知りうるもの、つまり発話者の直接的で私的な感覚を指し示す（PU I § 243）」言語のことである²⁾。つまりこの言語においては、例えば「彼の持つ赤色の感覚」は彼が今見ている赤色の色彩そのものを直接指し示している。また、「私の歯の痛み」は私が今私の歯に感じている痛みの感覚そのものを直接指し示している。さらに、「その人の視覚」はその人が今見ている視覚像そのものを直接指し示している。そして、これら「赤色の色彩そのもの」や「痛みの感覚そのもの」そして「視覚像そのもの」は当人にしか分からないものであって、他人が直接捉えることは決してできないものに他ならない。これら当人にしか捉えることのできないものを「私的対象」と呼ぶことにすると、この私的対象を直接指し示している語からなる言語である私的言語は、「それゆえ他人には理解することができない（PU I § 243）」言語だ、ということになる。この私的言語批判を、先の議論に適用するとどうなるだろうか。

先の議論においては、「その人には青く見えている消防自動車の色はと尋ねられると、その人は『もちろん赤色だ』と答える」ということが論理的に可能だとされた。しかしその人を見ている私なり誰かが、実際この様に述べるのが可能だろうか。換言すれば、この言明は超越

的な視点からの言明であって、われわれにはこの様な視点をとることは不可能なのではないか。と言うのは、私にしろ誰にしろその人以外の誰も「その人には青く見えている消防自動車」と述べることはできないはずだからである。何故なら、その人に消防自動車が何色に見えているか、その色は、その人の私的対象に他ならない。よって、その人以外の誰もその私的対象である色を述べることはできない。言い換えれば、問題の言明は私的言語になっている。それ故、問題の言明は誰も理解することができない、言明擬き、疑似言明に他ならないのである。

さらに、実はその人自身もそう述べることはできないのではないか。その人が私だったとすると、私は「みんなには赤く見えている消防自動車が、私には青く見える」と述べることができるだろうか。私にはみんなに、つまり他人にその消防自動車が何色に見えているのか直接は分からない。それは他人の私的対象である。よって、私には「みんなに赤く見えている消防自動車」と言うことはできない。そして私には「私には青く見える」と述べることもできない。私に見えている私的対象である色は、どうして「青色」なのだろうか。みんなが「赤い」と言っている色も、「青い」と言っている色も、私には直接捉えることもできなければ、私に見えている色と比較することもできない。私は私の私的対象であるその色に、どのようにしてみんなが使用している「青色」という名前を付けることができるのだろうか。このように私的対象を直接指し示す私的言語は、そもそも言語として成立し得ないのである。

感覚語の表出代替説

「赤色」や「痛み」といった感覚語は私的対象を直接指し示すものではないとすると、これらの語は一体何を表現しているのか。言い換えれば、私的言語においてではなく、日常言語においてこれらの語は何を表しているのか。それは赤さという色覚や痛みという感覚ではないのか。この点を明らかにする出発点となるのが、これらの語の学習の仕方である。ウィトゲンシュタインによれば、感覚語、例えば「痛み」は「痛み」という「語が感覚の根源的で自然な表出と結合され、そしてその代わりに使われる (PU I § 244)」という仕方で学ばれる。具体的には例えば、転んで膝小僧をすりむいて泣いている子どもに、「泣かないで、『痛い』と言いなさい」と教える。ここでは「痛い」という語は、泣くという痛みの「根源的で自然な表出」の言語的代替となっている。この様な考え方を、「感覚語の表出代替説」と呼ぶことにする³⁾。確かにこの説は感覚語を、感覚そのものを指し示すことなく、教えることができる。しかし、その妥当性は例えば、泣き叫ぶという痛みの根源的で自然な表出と痛みの感覚との関係にかかっている。彼自身この点について、次のように述べている。

PU I § 245 : それでは私はどのようにして、言葉で痛みの表出と痛みの間にさらに割って入れるのか。

この問いに対する彼の回答は、「割って入れない」である。ここでウィトゲンシュタインは「表出」に、この表出という振舞がなければ「痛み」という感覚がありえないという意味で「根源的」という形容詞を、そしてわれわれの殆どが行う表出だという意味で「自然な」という形容詞を付けている。

しかしそれでは、日常言語の「痛い」は「エーン」という泣き声を意味しているのだろうか。そうではなく、「痛み」という語が痛みの表出の言語的代替であるということは、「痛み」という語の学習の出発点に過ぎない。あるいは、この言葉が言語において然るべき位置を獲得するためのきっかけにすぎない。言語は一举に完全仕様の形で学ばれるものではない。言語は時間をかけて、漸進的に習得されるものである。泣き叫びの代替としての「痛いよ」はこの段階ではまだ、言語的な意味を持ってはいない。子どもはまだ、例えば、痛みを記述するとか救助を求める訴えといった意味ないし役割を意識して、この言葉を使用しているわけではない。それは、「エーン」という泣き声に言語的な意味や役割がないのと同様である。ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

PU I § 244 (部分): 「それでは君は、『痛み』という語は実は根源的で自然な表出である泣き叫びを意味している、というのか。」——とんでもない。痛みの言語表現——例えば「ここが痛い」——は、泣き叫びの代わりをするのであって、泣き叫びを記述するのではない。

けれども、この感覚語は表出の代替だという点は、「痛み」といった感覚語の出発点で、その基礎をなすものである以上、これらの語の意味を決定的に方向付けている。そして、感覚語を取得してしまっている大人によるこれらの語の使用も、表出代替の延長線上での使用に他ならない。何故なら、言葉は習ったようにしか使用できないからである。

「痛み」の概念の形成モデル

ところでウィトゲンシュタインは後期の著作において、問題の「言語ゲーム」という語を用いて、言語と人間の行為や生活との関係を強調している。

PU I § 7 (部分): 私はまた、言語とそれが織り込まれている行為の全体をも「言語ゲーム」と呼ぶだろう。

PU I § 23 (部分): 「言語ゲーム」という語は、ここにおいては言葉を話すということは人間の活動の一部である、あるいは生活の一部である、ということを実際させるための

ものなのである。

そしてこの点は「痛み」という語も例外ではない。例えば彼は、『断片（以下、Z と略記する）』において次のように述べている。

Z § 532：痛みの概念は、それがわれわれの生活において果たす特定の機能によって特徴づけられる。

Z § 533：痛みはわれわれの生活においてこの位置を占め、これらの諸関係を持つ。（つまり、この位置を占め、そしてこれらの諸関係を持っているものだけを、われわれは「痛み」と呼ぶのである。）

Z § 534：一定で標準的な生活表現に取り囲まれてのみ、痛みの表出といったものが存在する。悲哀や愛情の表出といったものは、それよりも更に進んだ特定の生活表現に取り囲まれてのみ、存在する、等々。

ここで言語と人間の行為や生活との関係を念頭に置きながら、小さな子ども（二歳前後）が「痛み」という語をどの用に習得していくのかについての、物語あるいはモデルを示してみたい。まず大人はその子どもが痛みの根源的で自然な表出を行っているとは判断される場合に、泣いたり、叫んだり、呻いたりする代わりに「痛い」と言いなさい、と教える。この訓練は様々な場面で繰り返されるだろう。例えば、子どもが指をドアに挟んで泣いている時に。そして、子どもが机の角の額をぶつけて叫んでいる時に。子どものお尻に出来物ができて呻いている時に。また大人は自分が転んでみせて、顔をしかめたり泣く真似をして「痛いよー、痛いよー」と言って教えたり、あるいは大人が子どもの手の甲を直接つまんで、「これが痛みだよ」と言って教えるかもしれない。ウィトゲンシュタインは子どもに対してではないが、「痛み」の説明の仕方を次のように述べている。

PU I § 288（部分）：では、どのようにして「痛み」という語の意味を説明するのか。おそらくジェスチャーによって、あるいは彼を針で刺して「ごらん、これが痛みというものだ」と言うことによってであろう。⁴⁾

その他、大人が子どもに意識的に言葉の訓練をする場面ではなくても、「痛いの痛いの飛んでけー」と言って泣いている子どもを慰めたり、子どもが棒を振り回している時に、「痛い痛

いするから、やめよー」と言ってやめさせたりして、子どもを「痛み」という語に言わば慣れさせていこう。あるいはこの語を子どもにすり込んでいこう。

しかし大人はその様な場面で、ただ単に「痛み」の表出代替訓練を行っているだけではないはずだ。同時に、「どうれ、見せてごらん」と言って手当をしたり、慰めてやったりするだろう。しかし時には、「大丈夫だ」と取り合ってくれないこともあるかもしれない。こういったことが繰り返されれば、子どもは「痛い」と言えば、大人は自分に注意を向け、治療してくれたり、慰めてくれたりすることを知る。(時には気にしてもらえないこともあるが。)つまり、単に痛みの表出、痛みの反射的の反応としての泣き叫びの言語的代替としての「痛いよ」から一歩踏み出して、誰かに来て欲しい、誰かに助けて欲しいといった意図を持って、子どもは「痛いよう」と言うようになるのではないか。言い換えれば、「痛い」という語とわれわれの幾つかの特定の行為とが、関係づけられていく。

次にというか、実際にはみな平行して行われると考えられるが、他の種類の感覚語の表出代替訓練が行われる。例えば、子どもがラーメンを慌てて口にして呻いている場合には、大人はそういう時は「熱い」と言うように教える。また、子どもが蚊に刺された足や手をポリポリかいていけば、大人はかかないで「痒い」と言えば、かゆみ止めを塗ってもらえることを教える。大人が子どもの脇腹をくすぐって、キャアキャア言って身もだえている子どもに、それが「くすぐったい」ということだと教える。つまり、「痛み」という語だけを単独で教えるということはない。様々な感覚語と共に教えられるはずである。むしろ逆に様々な感覚のとの関係の内に、痛みの感覚が位置づけられるのではないか。諸感覚が次第に体系化されて行くということ、は、個々の感覚がだんだんと明確になっていくということに他ならない。

ここで「概念」という言葉を使用するなら、当初は痛みの表出の言わば音声的な代替であった「痛い」が、次第に概念を持つ言語的代替である「痛み」に変わって行くのである。ウィトゲンシュタインは例えば次のように述べている。

Z § 548 : つまり、彼は本物の痛みを持っている。だから他人の場合に、自分が何を疑うべきかを知っている。彼は自分が直面している対象を持っており、それは何らかの振舞でも、またそれに類するものでもない。(だが、ところで!) 他人が痛みを持っているのかどうかを疑うために彼に必要なのは、痛みではなく、そうではなく痛みの概念なのである。

この子どもは「痛み」という概念を形成していく。概念とはある語と他の様々な語との関係において、さらにわれわれの様々な行為との関係において始めて成立するものであろう。他の概念とは一切関係なく、ある概念がそれ自身独立に成立する、ということはない。つまり、痛

みの概念は痛みの感覚のみで成立しているわけではないのである。逆にそう考えるのが私的言語論に他ならない。そうではなく、様々な概念ととりわけ感覚の諸概念との関係に立って、初めて「痛み」の概念が成立する。言い換えれば、諸感覚の体系の内に位置づけられなければならないのである。これに対して私的言語における「痛み」という語は、この語が痛みの感覚という私的対象を直接指し示している、あるいはこの語が私的対象と直接結合されている。従って、私的言語の「痛み」は、他の感覚語やわれわれの行為と関係づけることはできないのである。つまり、私的言語においては、私が顔を引きつらせ脂汗を垂らし呻くような声で「私は胸が鷲づかみにされるように痛い」と言っても、周りの人は誰も私を助けようとも、手当てしようとも、救急車を呼ぼうともしないだろう。

また次の点も同時に並行して行われると思われる。自分だけではなく他人の痛みの表出もまた教えられていく。子どもの友達が転んで泣いている場合、大人は「誰々ちゃんは、痛い痛いだね」と言って、「大丈夫かな」と転んだと子どもの所へ行って一緒に慰めたり、手当てするのを見せたりする。この点について『断片』には次のような節がある。

Z § 540: 自分が痛い場合のみならず、他人が痛い場合にも、怪我をしている所を手当てしたり、治療すること、——そして、自分の痛みの振舞には注意を払わないが、他人の痛みの振舞には気を配るということ。これらが根源的な反応であることを考慮することが、ここでは有益であろう。

Z § 541: しかし、ここでの「根源的な」という言葉は何を意味しているのか。それはまず、この種の振舞は前言語的であるということである。すなわち、言語ゲームはこの上に基礎づけられているのであり、これが思考の仕方の原型なのであって、これは思考の結果ではない。

Z § 542: われわれは、自分自身の場合との類比によって、彼もまた痛みを経験しているのだと信じているから、その人を手当てするのだ、といった説明に対しては、それは「本末を転倒している」と言ってやることができよう。そのような説明をする代わりに、人間の振舞についてのこの特別な一章から——この言語使用から——新たなアスペクトを知るべきである。

他人にも痛みを認めなくては、十全な「痛み」の概念とならない。「痛み」という語が第一義的に結合しているのは「痛みの根源的で自然な表出」である以上、自分と同じように表出している人は当然痛いのである。自分の痛みも他人の痛みも同じ「痛み」でなければならない。

痛みとは、痛みの表出をしている人が感じているものなのである。

また、痛みの概念は例えば「痛い人は手当する」、「痛い人は助ける」ということを含んでいるだろう。この事に自分と他人の区別はない。目の前で他人がひどく痛がっているとき、つまりその人が痛みの根源的で自然な強い表出をしているとき、表情も変えずに無視して通り過ぎる人は痛みの概念をまだ持っていないのではないだろうか。痛がっている人を手当したり、「大丈夫か」と声をかけたりすることが、他人の痛みに対する根源的で自然な表出なのである。

そして、他人の痛みは他人の振舞から推論されるものでも、他人の振舞を基に考察されるものでもない。痛みの表出をしている人がいるということは、そこに端的に痛い人がいることになる。他の例で考えれば、言語を習得し様々な概念を持っているわれわれは目の前の情景を、コレコレの四角い形をしているものは何かと考えて、「机だ」と推論し、そしてその上の円筒形の白いものは何かと考えて、「コーヒーカップだ」と推論し、最後に「机の上にコーヒーカップが置いてあるのだ」と結論するわけではない。われわれは端的に、机の上にコーヒーカップが置いてあるを見るのである。同様に、われわれは他人の振舞を見て、それが痛みの表出であると推論し、それ故その人は痛みをもっているのだ、と結論を出すわけではない。そうではなく、端的に痛みを持つ人を見ているのである。ウィトゲンシュタインは次のように述べている。

PU I § 310 : 私がある人に、私は痛みを持っている、と言う。彼の私に対する態度は、その時私は痛みを持っているということを、信じているものであったり、信じていないものであったり、不信を持っているものであったり等々、といったものであろう。

彼が「それはそれほど酷くはない」と言ったとしよう。——これは、彼が私の痛みの表出の背後に或るものを信じていることを証明するのではないか。——彼の態度は彼の態度の証明なのである。私の「私は痛みを持っている」という命題だけではなく、彼の「それはそれほど酷くはない」という応答もまた、自然な音や身振りで置き換えられていると考えよ。

私の痛みは私の表出の背後にあるものではない。「それほど酷くはない」と言った人は、私を端的に痛みをもっている人、痛がっている人、痛い人として見ている。事柄は逆で、痛みの表出と痛みが一体になっているから、「痛み」という語が可能なのである。表出と切り離されてしまっただけは、「痛み」という語をそもそも学ぶことができないのであった。そして、表出から切り離された痛みとは、まさに私的言語における「痛み」に他ならない。

人 間

このように痛みの概念や他の感覚の概念が形成され始めると、より抽象的な「感覚」という

概念もまた共に形成されてゆく。確かにより抽象的だという意味で、半歩遅れるかもしれないが、痛みの概念といった個々の感覚概念が成立して初めて、「感覚」という概念が形成される、というわけではない。個々の感覚概念と感覚という概念は相互に関係しながら、同時平行して形成される。そしてウィトゲンシュタインは、さらに次のように述べている。

PU I § 281:「しかし、君の言っていることは、例えば痛みの振舞がなければ痛みは存在しない、ということにならないか。」——それは次のようになる。人は、生きている人間、及び生きている人間に似ているもの（似た振舞をするもの）についてのみ、それは感覚を持っている、それはものを見る、目が不自由である、音を聞く、音が聞こえない、意識のある状態にある、あるいは意識がないなどと述べることができる。[PU I § § 282-7 参照]

「人間」という概念も「痛み」や「感覚」等々の概念と相互に関係しながら、同時並行して形成されていく。例えば痛みは、典型的には生きている人間が痛みの表出をしている時に感じているもの、ということになる。逆に人間とは、痛みを感じていたりいなかったりするもの、ものを見ていたりいなかったりするもの等々であり、さらに痛い時には手当てしてやるものということになる。

そうであるならば、単純に「痛み」という語は感覚の名前であり、「彼は歯が痛い」といった文は事実の記述だ、とするわけにはいかなくなる。われわれの生活の中で、一つの言葉は他の言葉やわれわれの様々な行為と関係しながら、成立している。言い換えれば、「痛み」という語は、われわれの言語とわれわれの行為とが織り成す体系において、つまりわれわれの言語ゲームの文法において、一定の位置を占めていることで成り立っているのである。

注

- 1) 反転スペクトルのパラドックスについての詳細は、塚原「反転スペクトルのパラドックス」を参照。
- 2) 私的言語批判の議論についての詳細は、塚原「反転スペクトルのパラドックス」を参照。
- 3) 感覚語の学習と感覚語の表出代替説についての詳細は、塚原「私的言語と『論理哲学論考』」を参照。
- 4) [] 内は塚原挿入。

文献表（邦訳のあるものは参照させていただきました。ありがとうございました。）

L. Wittgenstein

- ・『『私的経験』と『感覚与件』の講義のためのノート』（LPE）：‘Notes for Lectures on “Private Experience” and “Sense Data”’, in J.C.Klagge and A.Nordmann (eds.), *Philosophical Occasions 1912-1951*, Hackett Publishing Company, 1993. 邦訳：『『個人的経験』および『感覚与件』について』、大森荘蔵訳、ウィトゲンシュタイン全集 6、大修館書店、1975。
- ・『哲学探求』（PU、『探求』）：*Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953. 邦訳：『哲学探究』、藤本隆志訳、ウィトゲンシュタイン全集 8、大修館書店、1976；黒崎 宏訳・解説、『ウィトゲンシュタイン『哲学的探求』第 I 部・読解』、産業図書、1994。
- ・『断片』（Z）：*Zettel*, G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds.), Basil Blackwell, 1967. 邦訳：『断片』、管 豊彦訳、ウィトゲンシュタイン全集 9、大修館書店、1975。

その他

- ・塚原典央、「反転スペクトルのパラドックス」、『福井県立大学論集』、第 30 号、2008 年。
- ・塚原典央、「私的言語と『論理哲学論考』」、『福井県立大学論集』、第 31 号、2008 年。

